

# SEMINAIRE OUVERT 2003

Journal Mensuel Gratuit No.4-23 17 avril 2003

月刊  
セミナー通信二〇〇三  
第四号

二〇〇三年四月十七日発行

## SÉMINAIRE OUVERT 2003

FUJITA, Hiroshi (psychiatre-psychanalyste)

Le 4ème SÉMINAIRE

公開セミナー 2003 『心的構造論』

藤田博史 (精神分析医)

第4回第4講

「可能世界としての心的構造---様相論理・量子論理的心的構造について(その2)」

samedi 26 avril 2003 -----13h30-16h30

2003年4月26日(土) 13時30分-16時30分(開場時間も13時30分になります)

SALLE#501 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

会場: 日仏会館 501号室

Frais de participation : 1000yen 聴講料: 1000円

LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

10 min. à pied depuis la Sortie Est de la Gare d'Ebisu (ligne JR Yamanote)

日仏会館 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25

JR 恵比寿駅東口から「歩く歩道」経由で徒歩10分



Organisation: L'EUROCLINIQUE 主催: ユーロクリニック

Collaboration: DOLL FORUM JAPAN 協賛: ドール・フォーラム・ジャパン

Renseignements: BUREAU CULTUREL DE L'EUROCLINIQUE 問合せ先: ユーロクリニック文化部

TEL: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

### 目次

公開セミナー第4回案内	1	『プレーキを踏もう』 佐藤良平	6
『セミナー断章』 藤田博史講義	2~4	ヨーロッパ美術紀行 清水由美子	7
『ピブリオフィリア逍遥遊』 伊藤 敬	5	セミナー、フジタゼミ予告	8

発行  
EUROCLINIQUE  
編集  
ユーロクリニック文化部

## SÉMINAIRE OUVERT 2003

公開セミナー 2003

『心的構造論』より

「セミナー断章 2003」 第3回

講義 藤田博史

編集 榊山裕子

Le 3ème SÉMINAIRE

第3回第3講 「可能世界としての心的構造---様相論理・量子論理的心的構造について(その1)」より

samedi 22 mars 2003 2003年3月22日(土) 日仏会館

(『セミナー断章』は、公開セミナーのご紹介として、講義より断片的に抜粋して掲載しています)

### 精神病 psychose

「精神病」と一般的に呼んでいますが、わたしが「精神病」と言った時は、「精神分裂病」だけではなく「躁鬱精神病」——普通、躁鬱病、躁鬱病と呼んでいますけれども、正式な名前は「躁鬱精神病」です——も含まれます。フランス語では、精神病は psychose、精神分裂病は psychose schizophrénique と言います。躁鬱精神病の方は psychose maniaque-dépressive、ですからどちらも psychose という言葉がつくのです。

manie というのは躁、depressive というのは鬱。日本語の名称というのはかなり操作されているということがわかります。本当は「躁鬱精神病」なのですが、「躁鬱精神病」と言う人が一人もいないことは不思議なことです。「躁鬱病」と言うことによって、何かを隠蔽して、マイルドに加工している感じがします。

psychose と言うと、こういうものを全てふくむわけですが、「幻聴」が聞こえてきたり、「幻視」、いわゆる正常と認める人間が認めないものを、病気になると、「そこに何かが見える」と言ったりしますが、単純に常識の側に立ってわたしたちは、ありもしないのに見えているとか、聞こえないものが聞こえている、と思うかもしれませんが、向こうの側からわたしたちの世界を見れば、どうして聞こえていないの、どうして見えていないの、ということになるわけでしょう。

実はそこに優劣の差はなくて、ある可能な世界、あり得る世界の対立があるわけです。精神病の世界とわれわれ正常とよばれている世界。個人個人の対立だけではなく、たとえばここに精神病患者がいて、自分がいて、そういう対立も確かにあります。これはひとつの個のレベルで考えた場合の世界です。

個のレベルの世界、たとえば東山魁夷の世界とか、パブロ・ピカソの世界とか、ソール・クリプキの世界とか、サダム・フセインの世界とか、ジョージ・ブッシュの世界、そういう世界も在ると思いますけれども、実はそういう世界も単一の世界であるとは限らないです。その証拠は、わたしたちは寝ると夢を見ますけれども、夢のなかの世界で自分が予測し得ないことが起こったりとか、あるいは自分とは無関係な世界が登場しますね。一つの演劇の舞台に例えれば、舞台装置を作っているのも自分なのに、自分は舞台装置を作ったという意識はないですね、その中に、夢の場面に自分は登場するけれども、あらかじめその風景は出来ているわけです。実はその風景も、いってみれば自分自身の身体が作り出しているわけですから、全て自作自演であるわけです。自作自演でありながら、自分が到達し得ない世界が確かに自分自身のなかにも存在しています。

## 人格の交代 世界の交代

ですから人間が、個体としての人間がいたとしたら、その個体としての人間のなかには、複数の異なる世界が、同時に存在している、という風に仮定する方が自然です。だから「正常」と呼ばれている人も、ある特殊な状況下において、いわゆる「異常」と呼ばれているような症状を出す場合もあるわけです。

ですからここ数十年「分析哲学」という哲学が知の分野に静かに浸透してきていますけれども、その分析哲学的な知を現実のものとして、一番体験しているのは、もしかしたらわれわれ精神科医だと思うのです。精神科医のみならず、お酒にべろんべろんに酔っている自分とか、夢を見ている状態の自分というのは、まさにさまざまなポッシブル・ワールドのなかに放り込まれている、ということが言えると思います。

このところ「多重人格」という病態をとりあげる精神科医も増えてきて、テレビでとりあげられたりしていますが、その「多重人格」という呼び方は、「人格」に主眼を置いた言い方というか、「人格」を中心に考えた呼び名ですが、どういう病態かという、時間軸に沿って「人格」が交代するのです。たとえば何時から何時までは A 君だったのが、そのあと何時から何時までは B 君になり、そのあと C 君が出てきて、という風に、「人格が交代する」と言われていますけれども、possible world=可能世界とか、多世界論理的に考えると、「人格」という言葉はちょっと不適切な言葉です。

要するに、多世界が交互に現われていると風に考えた方がよいのではないか。その方がより理にかなっている。つまりいわゆる「人格」とか「自我」とか呼ばれるのは常に世界の裏返し、あるいは世界の写しとして現われてきているものです。ですから実は「人格」とか「自我」と呼ぶよりも、その一つの世界として、世界が交代しているという風に考えた方がよいわけです。

## 個人と可能世界

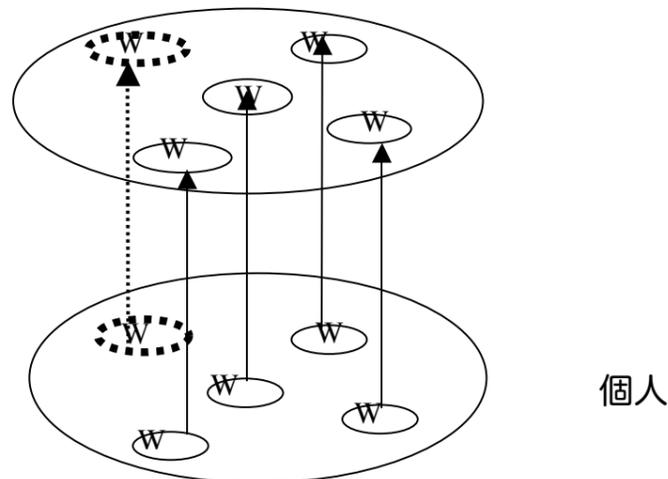
つまり一個人の中には、実はさまざまな世界が平行して同時進行している。ということは、一般にわれわれは「正常」だと思込んでいるけれども、今、ここで現に、現実に、異常な自分を形作る世界、要するに異常な世界も同時進行している。この身体はどこかで同時進行している。そういう複数の「可能世界」を同時に抱えて、同時進行させているのが人間なのだ。たまたまその「可能世界」のうちの一つが優勢になっている。そうなることによっていわゆる社会生活というものが営まれている、ということです。たとえば哲学者や文学者などは、自分一人の部屋に閉じこもった時、おそらく社会生活を営んでいるワールドとはまた別のワールドのなかへ移行してゆくことができる人々です。

こういう風にして——今は、漠然とした大雑把な言い方をしていますが——いわゆる一個人のなかには様々なワールド=世界が平行して同時進行している、という考え方に注目してみようというわけです。

そして、このような考え方が支持され得るか否か、ということ、様相論理的に——様相論理学はmodal logicと言いますが——また量子論理的に眺めてみよう、というのが、このセミナーの目的なのです。

時間軸

↑  
いわゆる  
<正常>  
  
<自我>



## 可能世界と精神分析

イメージ的に描くとどんな感じが、と言いますと（前ページ図）、ちょっと古いドイツの精神病理学者の考えに従うならば、個人のなかには共時的にも通時的にも統一されていると想定された一つの「自我」があって、それが正常か異常か、と問うてゆくような、いうそういう論理ですが、可能世界的な考え方をしますと、個人のなかにはさまざまな「可能世界」が併存している、それが時間軸に沿って平行移動している、という考え方です。点線で描いたW1がいわゆる正常な「自我」であるとする、これはいわば正常な世界です。Wというのはワールドの略ですが、W1の他にも、W2とかW3とかW4とかW5もまた同時進行しているわけです。

では何故W2とかW3とかW4とかW5というものがどうして一遍に現われてこないのかということ、フロイトは「抑圧」という機能が現われて、彼が想定した「無意識」という部分に他の世界が格納されている、という風な考え方をしたわけです。これはひとつの考え方です。2以降のワールドはとりあえず「無意識」のなかに「抑圧」されて格納されている。したがって見かけ上はW1だけが存続しているように見える。これは精神分析的な考え方です。

わたしも最初はやはりそういう風に考えていました。しかし最近では少し考え方が変わってきました。「抑圧」とか「無意識」の理論に依拠した説明は、今日ではかなり古典的かな、という感じがします。どういうことかと言いますと、今、現にわたしがこのW1のワールドのなかで話しているこのワールドのなかに、ワールド2が混入しているという考え方です。抑圧させてどこかにあるのではなくて、同時進行で混入しているのです。実は、W3もW4も。要するに抑圧されてどこかにしまわれているわけではなくて、混入している。ただ混入していることに気がつかない。混入していることがわからない。われわれがあるワールドを、別のワールドから、そのワールドがあることを認めるためには、そのワールドに到達できなければいけない。宇宙空間を見てあそこに月が浮かんでいる、というためには月から光が到達していないといけません。つまりある異なるワールド間の到達可能性、到達できるか否か、という問題こそが重要なのです。そういう観測地点に視点をシフトさせた方が、より全てを平等に、サイエンティフィックに取り扱うことができるようになるのではないのでしょうか。

フロイトの第一の局所論とか、第二の局所論とか、卵形のモデルとか、そういうものはやはり、自我が頂点にあって、あるいは自我があって、超自我があって、エスがあって、とか、あるいは意識があって、前意識があって、無意識がある、というような発想、つまりどこかでピラミッド形の発想があるわけですが、そういうものを打ち砕いて、すべては並行にただ時間軸に沿って動いているだけだ、と。たまたまわれわれはそのワールドのなかの一つのワールドのなかで生きている、と。別のワールドはどこかにあるのではなくて、同時進行しているのだけれども、わたしたちには到達できないだけなのだ、と。

## 精神病の治癒可能性について

「精神病」はどうして起こるのか。精神病患者は、W2が精神分裂病のワールドだとすると、われわれの正常なW1も生きている。ただ優勢なのがW2であるが故に、われわれの世界との到達可能性に何らかの障害が生じている。こういう考え方に立つと、皆さん一人一人が精神分裂病になり得るわけだし、躁鬱病になり得るわけなのです。かつワールド相互のアクセシビリティ=到達可能性について、もう少し厳密に吟味して、操作し得ることが出来るならば、そのなかを自由に行き来することもまた可能になる。今の進化レベルの人間では、せいぜい一つのワールドに限定して生きてゆかざるを得ないけれども、将来、人間の精神構造がもう少し自由で複雑なものになってきたら、自由にこのW1、W2、W3を行き来することができるようになるのかもしれない。

今のところ「多重人格」というレッテルを貼られた人たちは、一種の障害（ディスオーダー）であると決めつけられているし、彼らは治療されなければならない、と思込まれています。しかし、もしかしたら、そういう人たちは、多世界間に行き来することのできる未来人の先取りなのかもしれません。つまり、同時進行しているワールド間を自由に行き来している人たち、ということにもなるわけです。

こういう考え方に立つと、皆さん、だんだんおわかりになってきたかもしれませんけれども、治療するということは、つまり、いわゆる精神病のワールドから正常なワールドへ移行させるには、どのような手続きが必要か、という問題に置き換えられ得るのです。精神病を治癒させる、という観点にたてば、ある壊れたものを治す、という素朴な発想をすでに超えています。

それはまるで京浜東北線と山手線が平行して走っていて、ポイントの切り替えでカチャッと電車を入れ替えるような感じです。病気の治療、精神病の治療という問題が、平行して走っている線路のポイントをいかに切り替えて、aという線路をbに繋ぐか、bという線路をどういう風にしてaに繋ぐかという、そういうポイント切り替えの問題として新たに浮上してくるのです。

## ビブリオフィリア逍遥遊 (3)

伊藤 敬

### ワーグナーをめぐって

わたしは（何を隠そう）熱烈なワグネリアンなのである。オペラに足しげく通うようになったのは、昭和から平成に変わる頃、オーチャードホールの柿落としで、いまは亡きシノーポリの「タンホイザー」を見てからのことだから、経験年数はあまり自慢するわけには行かないし、「正統派のワグネリアン」を自称する人たちからは、かなり偏った嗜好を指摘されるようなところがあるかもしれない。

たとえば、わたしは抽象的な舞台装置のもとに、東西ドイツの統一後に「ベルリンの壁崩壊」を暗示するような、単なる政治的な絵解きに堕した演出は好まないし、あるいは、「さまよえるオランダ人」が、結局は神経症的なヒロインの妄想に過ぎませんでしたとき、とするような解釈を示されると、なんだか作品を冒流されたような気がして、無性に腹が立つのである。

その点、新国立劇場で、一昨年から四年がかりで「ニーベルングの指環」四部作を、年に一作ずつ上演していくところみは、準・メルクルの手堅い指揮とキース・ウォーナーのケレン味たっぷりの奇抜なマンガ風舞台演出との掛け合いが、本当におもしろい展開を見せている。なにしろ、「ラインの黄金」、映画館のスクリーンに見立てられたライン川からはじまり、「ワルク्यूレ」第二幕の「ワルク्यूレの騎行」では、茶髪の看護婦の扮装をしたワルク्यूレたちが、病院の廊下でベッドを運んであちこちと駆けめぐるのである。今年のプログラムでは、音楽評論家の長木誠司氏が、昨年までの二作の演出について、「複雑系ウォーナーのカオスな夢、あるいはカカンな『トーキョー・リング』のラカンなパラフレーズ」という長いタイトルをもったエッセイで、ラカンやジジェクを引き合いに出しながら、今後のウォーナー演出への期待を、かなり分りにくい書き方で表明されていたが、かれの演出を歓迎するのは、あるいは少数派なのかもしれない。それかあらぬか、今年の「ジークフリート」では、ケレン味は後退し、どんな奇抜な着想を舞台上に示すのかなという期待だけは、みごとに裏切られたかたちであった。歌手も演奏もすばらしかったが、昨年までの舞台を見てしまうと、ジークフリートが名剣ノートゥングを鍛え直すために電子レンジを用いたり、第二幕に出てくる森の小鳥が、着ぐるみの中に歌手が入って登場するといった程度では、驚くわけには行かないではないか！ 第二幕の大蛇の登場するシーンなど、いかようにも工夫する余地はあったはずである。しかし、わたしとしては、これは来年の「神々の黄昏」の終幕にびっくりするような趣向をもってくるために、あえて「中だるみ」を意図したというように、好意的に解釈したいと思う。

それはともかく、わが国におけるワグナー研究家は、音楽関係かドイツ文学関係の人が主であり、文献も、もっぱらドイツ語か英語関係のものしか省みられないのがつねであるのは物足りない。五年前にパイロイト音楽祭に赴いた折には、ワグナーの旧居ヴァーンフリート荘で「ワーグナーとスペイン」という企画展が行われていて、ダリとブニュエルの「アンダルシアの犬」に、オリジナル版としてタンゴと「トリスタンとイゾルデ」を組み合わせた音楽をつけたものと、現代音楽をバックに流したものとを交互にビデオ上映するところみも行われていて、わたしはたいへん面白いと思ったが、日本人は、ここをほとんど素通りしてしまうのだ。また、フランスとワグナーのかかわりにも、因縁浅からぬものがあるのに、わが国では、ボードレールやマラルメとの関連以外で論じられることは稀である。

たとえば、ワグナーと同時代のフランスに話をもっていくと、テオフィル・ゴーチェの娘のジュディット・ゴーチェが、夫の詩人カチュール・マンデスとヴィリエ・ド・リラダンと一緒にワグナーのもとを訪れて、のちに訪問記を本にまとめているし、リラダンの短編には、そこかしこにワグナーの音楽に対する言及や暗示がばらまかれている。(余談ながら、このジュディット・ゴーチェには、西園寺公望との共訳による「古今集」の仏訳がある。)もう少し時代をくだると、薔薇十字団のジョゼファン・ペラダンに「ワグナー全芝居」という本があって、同時代人によるコンパクトな梗概としてたいへん興味深いので、わたし自身、この本の翻訳を試みようと思ったが、ペラダンが言及する友人、知人の背後関係にある程度把握しようと思って調べはじめたものの、ほとんど調べがつかずに投げ出したままになっている。

はなしを現代にもつてくると、レヴィ・ストロースの「はるかなる視線」(みすず書房)の下巻のバルジファル神話系譜学の文章は見落とすわけにいかないし、「フランスの山口昌男」とも申すべきジルベール・デュランの「美術と原型」(PUF 未訳)は、ユング心理学をダシに使いながら、ほとんどをワグナー論で占めた奇妙な本になっている。

影響関係といえば、ジュリアン・グラックのデビュー作「アルゴールの城にて」(白水社)は「バルジファル」の再話であると作者自身が公言しているし、また、かれは「バルジファル」にちなんで「漁夫王」という芝居も書いている。そうして、グラックの散文詩の邦訳からスタートした詩人の天沢退二郎氏が、グラックに導かれるように、フランス中世文学の研究に傾倒して行ったことは、ワグナーの玉突き的な影響関係だと言え言えないこともない。

## ブレーキを踏もう

佐藤良平

### 連載2 文化的水商売は自分の分際を弁えよ

仕事柄、名の知れた出版社やレコード会社に出入りする機会が多い。そうした折に、以前から不思議に思っていたことがある。あんなに立派な社屋やインフラは本当に必要なものだろうか？ 所詮こっちは零細な個人営業の立場だから、私の考えには幾分かの僻みが含まれていることは確かだ。それにしても、ポロポロのビルで仕事をした方が良いんじゃないかとまでは言わないが、どうも必要以上に豪華であるような気がしてならない。

特に出版社がそうなのだが、もともとは机一つに電話一台あれば仕事ができると言われた業種である。原稿執筆・デザイン・版下作成・印刷・製本・保管・流通と、商品の製造プロセスがほとんど外注で済んでしまうからだ。最近は携帯電話があるから、固定電話さえ必要ないかも知れない。レコード会社だって似たようなもので、今は独立系の録音スタジオがいくらかもあるので、社内にスタジオを抱えなくても済む。実際にディスクを製造している生産部門は別だが、こと制作段階に関して言えば、事情は出版業と変らない。

出版業界と音楽業界は、ともに「水物」と呼ばれるソフトの販売によって成り立っている。当然、長いことヒット作が出ない時期もあれば、何かのはずみで笑いが止まらなくなるほど儲かる時もある。しかし、元来は双方とも地味な業種であった。通常は担保になるような資産を殆ど保有せず、コストの大半を人件費が占め、重さもない情報を持って日銭を稼ぐ。いわゆる古典として認知されたロングセラー作品は別だが、主力商品である情報は価値の目減りが極めて早い。新奇で売行きの良い情報を途切れることなく出し続けると、基本的に自転車操業である出版社やレコード会社はたちまち倒れてしまう。

そうした構造が一変したのが、バブル期の異常景気だった。社会全体の金回りが良くなり、人々はみな気でも違ったかのように出版物や音楽ソフトを買い漁った。商品さえ作れば、質の高低を問わず、何でもかんでも売れた時代だった。消費者は、明らかに必要以上の買い物をしてた。それは取りも直さず、必要以上の物を持って大成功するチャンスを企業側に与えた。今日言われている「ヒット商品」というのは、常日頃の売上を大きく越えた場合に与えられる称号である。買い手が必要としている以上の物売りつけることで初めて、業界内で「成功しましたね」「うまくやりやがったな」と言われるわけだ。

バブル期に業績を伸ばした大手の出版社やレコード会社は、今でもバブル期の夢を捨てられずにいる。一度甘い汁を吸った人間は、その記憶をなくす事ができない。あの時期に社屋を新築した、或いは見当違いの設備投資をした会社は決して少くない。「机一つに電話一台」という本分を忘れて、自分たちがこれまでとは別の、もっと高級な何かになったかのように誤解した結果だ。私は素朴に疑問に思う。あの出版社のビルにはまっている窓ガラスは、果たして私の月収で買える価格だろうか？ あのレコード会社のロビーに敷いてあるカーペットを買うには、いったい何枚のCDを売らなければならぬだろうか？

出版業界や音楽ソフト業界は、自らを文化産業と位置づけている。

自分たちが作り出す商品を買うことは文化の育成に資する正しい行為であり、国民に推奨して然るべき行いであるとして誇っている。よく言われる「本は他の商品と違う」「音楽は心を豊かにする」といった彼らの主張には、それなりの正しさがある。おまけに、憲法によって表現の自由を保証され、産業としても再販制度によって法的な保護を受けている。

しかし、先に述べた通り、その実体は水商売以外の何物でもない。去年と同じ程度の儲けが今年も来年も再来年も転がり込んでくるとは誰にも断言できないのだ。彼らはそうした実体を忘れ、自分たちが水商売ではなく、あたかも普通の企業であるかのように勘違いしている。或いは「ウチは普通の企業なんだ」と思い込もうとしている。ひょっとしたら、彼らは長年にわたって「普通の企業」に対するコンプレックスを密かに抱えてきたのかも知れない。とにかく、普通の企業なみの外見を整えて、他業種や銀行や世間に引け目を感じないだけの自信を持ちたい。それこそ、彼らが必要以上に豪華なインフラを自らに奢らうとした動機ではなかったのか。

一度大儲けしてしまうと、それがまぐれ当たりの結果だろうが何だろうが確固たる実績として扱われ、その数字によって翌年度以降の予算規模が決められることになる。「今年これだけ利益が上がったのに、何故に来年も同じだけ儲けられないはずがあるのか」という考え方だ。それはあくまで普通の企業だけに許された予算の立て方であって、水商売にはお呼びでない。しかし彼らは、水商売を製造業なみに安定したビジネスモデルに変えていこうとしたのだ。その結果、いつの間にか「すぐれた文化的商品を生み出すためにインフラを整備する」という構造が逆転し、「既存の、または今後導入するインフラを維持するために必要な売上の立つ商品を生産する」という倒錯した経営を生み出すに至った。量的な拡大は疑いなき正義であり、必要以上の数量を売ることはこの上なく尊く、より程度の低い顧客を捕まえるために商品のレヴェルを下げるのは善である。こうした方針によって、文化産業の生産物はこれまででない品質低下にさらされている。「文化とは何か」と自問自答してブレーキを踏むような社員が、現場の業務を勤め上げられるはずもない。

新しい書物やCDを買おうとする時、私は必ず考えてみる。「この商品は発売元の企業が自らを維持する目的で製造したのか？ それとも、本当に文化に貢献しようとして作ったのか？」と。無論、単純にどちらかと言い切れるものではない。しかし、バブル期より前であれば、そんなことを考える必要はさほど無かったように思う。買い手は作り手を信頼していたし、作り手は買い手を信頼できた。今はどうだろうか？

文化的商品のユーザたる私取り得る最後の手段、それは買い手と作り手の信頼が保たれていた時期に作られた作品だけを選んで買うことだ。企業が「これは美味しいですよ」と嘘を言って我々に売りつける、腐ったゴミのような書物やCDを買うのはゴメンだ。それらを大多数の人々が「美味しい、美味しい」と言いながら喜んで食べているとしても。

## ヨーロッパ美術紀行

## (1) パリで展覧会をはしごする

清水由美子

「古い」ヨーロッパのど真ん中、ブリュッセルに住んでいる。アムテルダムやパリ、ロンドン、デュッセルドルフなどのアートの中心地への日帰りも可能だ。近年、高速列車網もどんどん進化し、パリへはタリスで1時間25分、ロンドンへはユーロスターで2時間40分で着いてしまう。将来はさらに短縮されそう。

気になる美術展が開催されるとなると、他の主だった展覧会や、未見のみどころなども考慮に入れて日程を組み、旅の手配をするのだが、その過程がけっこう楽しい。いかに対費用効果をあげるか、腕の見せ所でもある。

ビジネス客の多い都市に泊まる場合、週末および年末年始や7、8月のバカンス期の、空室が多くなる時期に合わせるがよい。通常の半額近くになることだってある。ホテルの料金表はあっていないようなものという不文律があり、ある程度交渉が必要となる場合もある。

「金曜日ですよ。週末料金は出ていませんか？」

「調べてみましょう（ととぼける・・・と私には思える）。ありましたよ。朝食込み〇〇ユーロです。」

2002年の最後を飾ったのは、クリスマスのイルミネーションで飾られたパリへの1泊2日の旅だった。お目当ては、オルセー美術館の「マネ／ベラスケス 19世紀のスペイン様式」展、グラン・パレの「マチス／ピカソ」展、そしてパリ市立近代美術館（パレ・ド・トーキョー東翼）の「フランス・ピカビア」展である。

長蛇の列が予想されるグラン・パレだが、夜8時までオープンしているので、概して夕方に赴くのが得策である。その前に一休みできるように、今回はグラン・パレの近くに宿を確保しておいた。

シャンゼリゼ大通りに並行する裏通りにあり、エリゼ宮にほど近いホテルには朝のうちにたどり着いた。夫は、私が未知のホテルを予約したと知ると眉をひそめる。当り外れがあるからだが、私としては馴染みのないカルチエに泊まって街の異なる表情に触れるのが楽しみだ。今回は、最初に案内された部屋が気に入らない旨を告げたら、あっさりとしてセミスイートほどの広々とした部屋に替えてくれて夫も大満足。ホテルには早めに着くに越したことはない。

近くのカフェで軽い朝食を取った後、コンコルド広場を経由して壮麗なパリ風景を楽しみながらセーヌ川沿いに20分ほど歩くとオルセー美術館である。

「マネ／ベラスケス」展は、それぞれ時代と国を代表する偉大な二人の画家のみならず、ムリーリョ、スルバラン、ゴヤなどのスペインの画家、ドラクロワ、クールベ、ミレー、ドガなどのフランスの画家から広範に作品が集められていた。フランスで19世紀に誕生、発展した西洋近代絵画が、17世紀のスペイン黄金期や、その後に登場するゴヤの絵画遺産にいかに向っているか、驚くほどだ。19世紀初頭のフランスではまだ極めて影の薄かったピレネー山脈の向こう側の芸術が、それまで理想とされたラファエロに取って代わるのである。

マネは私が最も惹かれる画家である。マネがひどく気になる存在になったのは、かの有名な『草上の昼食』や『オリンピア』を初めて目のあたりにした時ではなく、ミュンヘンのノイエ・ビナコテークで『アトリエの昼食』の前に立ったときである。テーブルにどちらかといえば行儀悪く寄りかかり、ベラスケスやゴヤを思わせる黒々としたジャケットでめかし込んだ若い男が前面に、二人の人物が後方に描かれている。黒い猫や、牡蠣、レモンなどのマネの好んだ小道具も散りばめられている。さりげない絵のようでありながら、謎めいていて、少し不安にも似た新鮮な衝撃を覚えた。その印象を言葉にすることができないまま、私はマネを「画家中の画家」と崇めた。そのマネが「画家中の画家」と絶賛したベラスケスの作品に不安も衝撃も感じることはない。プラド美術館の、かの謎めいた『ラス・メニーナス』も幸福感に満ちている。

午後、一度ホテルへ戻った。「マネ／ベラスケス」展のカタログの重いものなのって、とても気軽に持ち歩ける代物ではないし、朝早かったからちょっと昼寝も悪くない。

16区にあるパリ市立近代美術館へは、エレガントなブティックや高級ホテルのブラザ・アテネなどが並ぶ、おそらくパリで最もシックなアヴェニュー・モンテーニュをぶらぶら歩きながら行くことにする。アルマ広場の近づいたところにシャンゼリゼ劇場がある。このモーリス・ドニ作の天井画を見たいのだが、コンサートのチケットを入手するしか見学する方法はなさそう。銀色に光るセーヌ川やエッフェル塔が見え隠れしてくる。

パリ市立近代美術館の前にはやはり行列ができていた。パリの人たちは、映画館の前にも、美術館の前にも皆当然のこのように整然と列を作る。

私にとって初めてのピカビア回顧展である。正式なタイトルは「フランス・ピカビア サンギュリエ・イデアル Singulier Idéal」。ピカビアは、1879年、キューバで財をなしたスペイン人の家系にパリで生まれ、1953年に没している。なんとというアナーキーさ。フォービズムの時代、キュビズムの時代、マルセル・デュシャンと興じたニューヨーク・ダダ、そしてパリ・ダダ。コート・ダジュールでの放蕩生活……。作風がころころ変わり、1930年代終わりから40年代にかけて、覗き見趣味の雑誌の写真などをコピーした、看板風の「裸体」シリーズなどにはほとんどギョッとす。

大スターのデュシャンの影でいささかマイナーに取り扱われてきたピカビアだが、近年特にアーティストの間で関心呼び起こしているらしい。70年代には「ダダの時代」、80年代初めには「透明の時代」、そして「怪物の時代」、「裸体の時代」と、ポップやネオ・ダダ、具象的なウォーホール、ポルケなどによる新しい潮流が起こるたびに新しいピカビアがかつぎだされたのだ。今、スポットライトが当たっているのは、40年代と「点」のシリーズらしい。ピカビアは、「アーティストのためのアーティスト」だったのか。

ホテルで少し休憩し、グラン・パレへ赴く。夕方の6時ごろ、シャンゼリゼ大通りのイルミネーションに元気付けられる。凱旋門がライトアップされ美しい。今日のメニューの最後を飾る「マチス／ピカソ」展。薄暗い前庭に人の列が50メートルほど続いている。やれやれ、また並ぶのかとため息をつく、「文化とは辛抱よ」とすぐ前のパリジャンヌがほほえんでいる。

「マチス／ピカソ」展は、20世紀を代表する極めて重要な二人のアーティストが、いかに深く影響しあったかを検証している。フォービズムをリードするマチスと、それより12歳若く、まもなくキュビズムを生み出すことになるピカソが、1906年に出会い、その交流はマチスの死まで続いた。お互いに絵を贈りあったりもしたらしい。有名な大作が多くこの展覧会のために貸し出され、30余のグループに整理されている。二人の影響の度合いがまざまざと明るみに出される、迫力のある展覧会だ。

「二人のどっちが好き？」と夫がきいてきた。「マチスかな」と正直に答えたら、「君はフォーマリストだね」とまるで私の本質をあばくみたいな言い方をするのだ。マチスを選ぶか、ピカソを好むかで、単なる嗜好以上の問題に触れるのだろうか。それが何であるのか、いまだに考えている。

今、私の目の前には、この時の展覧会のカタログ3冊が山積みされている。ピカビア以外はソフトカバーだが、全部で6、5キロ近い。どれも堂々たる美術書である。展覧会ビジネスはまだまだ健在のようだ。

## SÉMINAIRE OUVERT 2003

## 公開セミナー 2003 『心的構造論』

Le 5ème SÉMINAIRE

FUJITA, Hiroshi (psychiatre-psychanalyste)

samedi 17 mai 2003, 13h30-16h30

SALLE#501 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

第5回第5講

『可能世界としての心的構造——様相論理・量子論理的心的構造について（その3）』

藤田博史（精神分析医）

2003年5月17日（土） 13:30～16:30（開場時間も13:30になります）

会場：日仏会館 501号室

Frais de participation: 1000yen 聴講料: 1000円

主催：EUROCLINIQUE 協賛：DOLL FORUM JAPAN

問合せ先：ユーロクリニック文化部 Tel: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

## Séminaire Privé 通称「フジタゼミ」

藤田博史によるプライベートゼミ、通称フジタゼミが、原則として毎週木曜日に開催されています。自由発表の場トピカ、原書講読（現在はジャック・ラカンの未公開セミナー「ル・サントム LE SINTHOME」の講読）などをしています。語学力、資格は一切問いません。今後の予定は随時「精神分析医 藤田博史の公式サイト」に掲載されます。サイトアドレスは <http://www.fujita.com> です。なおインターネットをご利用でない方は、ユーロクリニック文化部まで電話でお問い合わせください。

## 今後のフジタゼミの予定(変更されることがあります)

- 第42回フジタゼミ 2003年4月24日（木） 19:00～22:00 備屋珈琲店恵比寿店会議室（恵比寿）
- 第43回フジタゼミ 2003年5月1日（木） 19:00～22:00 喫茶古炉奈会議室（秋葉原）
- 第44回フジタゼミ 2003年5月8日（木） 19:00～22:00 備屋珈琲店恵比寿店会議室（恵比寿）
- 第45回フジタゼミ 2003年5月15日（木） 19:00～22:00 喫茶古炉奈会議室（秋葉原）

## SÉMINAIRE OUVERT 2003 Journal Mensuel Gratuit No.4-23

月刊『セミナー通信 2003』フリーペーパー版 4-23号

2003年4月17日

発行 EUROCLINIQUE

編集 ユーロクリニック文化部 榊山裕子

tel: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

メールマガジン版もあります。E-mail: seminaire@mac.com までお申し込み下さい。

